

ことばの力で地球規模の問題を個人の問題として捉える 継承語としての日本語のクラスからの報告**

Yoko Nishimura-Parke, Saturday School of Community Languages,
NSW Department of Education and Communities
yoko.nishimura-parke@det.nsw.edu.au

要旨

Yoko Nishimura-Parke who taught the Heritage Japanese preliminary course in 2012 and continues to teach Higher School Certificate course in 2013 implemented a unit of work (class activities) inspired by two major items; 1 the literary work of a 15-year-old poet from Fukushima featured in Click Nippon, 2 a letter from Yvonne Margarula to the Secretary General of the United Nations. As the final activity, the students create a literary work in the form they choose to express their love and care to something they want to protect. In this process, students discuss, think and become aware of Kotoba no chikara, the power of words/language.

キーワード

「グローバルシティズンとしての個人」、「本物の人」の声、生徒の声、バイリンガルの継承語日本語コース

1. はじめに

2011年にNSW州で、継承語としての日本語のコースが始まった。このコースは連邦政府の予算でシラバスが作成され、まずアジア言語4ヶ国語のコースがNSW州で開講された。日本語はそのうちのひとつ。シラバスには、理論的根拠 (Rationale)の最後の段落に以下のように述べられている。

* English title: Notice and Reflect on Power of Words Through Studying Global Issues: Sharing the experience and practice of a Heritage Japanese classroom

* This paper was presented to the 18th Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia at the Australian National University from 8th to 11th July 2013 and has been peer-reviewed and appears on the Conference Proceedings website by permission of the author who retains copyright. The paper may be downloaded for fair use under the Copyright Act (1954), its later amendments and other relevant legislation.

The Australian Government has placed a high priority on Australians ‘becoming Asia literate’ (Melbourne Declaration of Educational Goals for Young Australians, 2008). The government has also recognised the importance of developing political, social and cultural links with close and influential neighbours and the strategic importance of learning the Japanese language in relation to the economic future of Australia. The study of the Heritage language course will make a significant contribution to these priorities. (Heritage Japanese Stage 6 Syllabus Preliminary and HSC Courses 2010 page 6)

上記の段落の訳：オーストラリア政府は国民がアジアに対する教養を持ち、アジアの言語が読み書きできるようになることを奨励している。政府は影響力の強い近隣諸国との政治的、社会的、そして文化的つながりを発展させていく重要性を認識し、またオーストラリアの経済的見通しと関連して日本の言語を学習することが戦略として極めて重要であると認識している。継承語としての日本語のコースの学習者はこの政府の政策に大きく貢献するものである。

(ニシムラパーク訳)

継承語としての日本語のコース新設のもう一つの背景となっているのは、移民の増加に伴い、その子ども達の言語教育のニーズが高まってきたことであろう。2006年のセンサスによると、シドニーの35%の人口が家庭では英語以外の言葉を使っている。(Sydney Social Atlas 2006)

そのような事情から特に移民の多いシドニーなどでその両親らを含むコミュニティー・グループからの継承語としてのアジア語のコース設立の要請が高まったという一面もあったと聞いている。

2012年に、第二期生としての11年生を担当し、2013年、そのグループがHSCコース¹を終了した。継承語としての言語教育は教授法、教材、教師のネットワークなどの面でオーストラリアでは新しい教育分野だ。以前は、日本からの移民の子ども達が日本語を学校教育で学習しようとする、バックグランドスピーカーズコースか、外国語としての日本語のコースか、この二つの選択しかなかった。バックグランドスピーカーズコースというのは、ネイティブスピーカーの為のコースで、外国語としての日本語のコースは、日本と接触なしに育った子ども達のコースである。当然、どちらのコースもこの子ども達にはふさわしくない。バイリンガルの素質を既に持っているこの子供たちに即したコースができたことは親としても教師としても大変喜ばしいことである。その新しい分野に関わった教員として、生徒の学びと教員自身の学びを記録し、広く共有し、次に繋げて行きたいというのがこの報告の目的である。

くりっくにつぼん²に掲載された詩を使うことによって、生徒が本物の「人」と深く出会い、また自らの想いを「人」に伝えようと試みた。その一連の授業の概要を報告したい。

¹ Higher School Certificate Course: NSW 州のハイスクール卒業認定試験

² くりっくにつぼん: 「深く人に出会うこと」をコンセプトとして、人の内面にフォーカスしたインタビュー記事や、中高校生レポーターの生の声による等身大の生活文化紹介を提供している多言語ウェブサイト。
<http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/index.php>

2. 実践の概要

継承語コースのシラバスに掲げられている学習すべきトピックの一つに「グローバルシティズンとしての個人」がある。このトピックに焦点を合わせたユニットをデザインするに当たりシラバス必須事項を満たすことはもちろんであるが、もっと普遍的な目的として、生徒たち自身に将来グローバルシティズンとして活躍してほしい、その為には、今どんな学習が必要かという事を念頭においてデザインにあたった。

生徒数	ひとコマの授業	頻度	要した授業時間
18名	180分	週1回	180分X7回

		授業内容
授業1	グローバルイシューの導入	自分が一番心配しているグローバルイシューをリサーチしてクラスで発表する。
授業2	人権について考える	私たちはどんな人権を持っているのか、人権宣言を読む。そして写真集を使って子供達の人権は守られているか考える。
授業3	福島現状	人権という概念を持って福島の人々の言葉を聴く
授業4	自分とのつながり	福島と私たちが住んでいるオーストラリアの関係を探る
授業5	詩の鑑賞	グローバルイシューの知識を持ってくりっくにつぽんから、詩「福島へ」を読む
授業6	詩の鑑賞	自分が好きな詩をもちよってみんなで読む
授業7	詩の創作	「守りたいもの」をテーマに詩の創作に取り組む
	まとめのディスカッション	ことばの力を考える

3. 授業の実際

3.1. グローバルイシューのリサーチ

まず、休み中の宿題としてリサーチをさせた。生徒は各々、自分が心配している地球規模の問題を取り上げ、

- どこで何が起こっているのか
- 犠牲になっているのは誰か
- どうしてそのような問題が起こっているのか

この3点を必須事項としてリサーチに臨み、クラスで発表した。生徒たちの選んだ問題は以下のとおり。

- 人口問題
- 地球温暖化
- 貧困問題
- 病気の問題
- ポイ捨て
- 森林伐採

- ゴミ問題

- 水の問題

- 漂着ごみの問題

漂着ごみの問題を取り上げた生徒の発表の中に、「加害者は私たちで、被害者もまた私たちだ」というコメントが印象的だった。

3.2. 人権を知り、考える

次に、人権宣言を読んだ。グローバルイシューを考える際の基本的知識だと考えたからだ。これは、日本語の学習というより、彼らが人として知っておかなければならないことなので、内容理解に重きを置き、日英両言語で意味を確認した。そして、私たちが住む国では、守られているように見える「人権」だが、世界では人権が守られているのだろうか、と生徒に質問してみた。貧困問題を取り上げた生徒からは、平等じゃないとおもう、すべての人が自由だとは言えない、世界にはいろいろな状況で住んでいる人々がいるから、などの意見が出たが、すでに問題を認識している生徒と認識していない生徒が約半数ずついた。

写真集 *Where children sleep* (By James Mollison - Chris Boot 2010) を用いて、授業を展開した。この *Where children sleep* は、世界のいろいろな状況で暮らす子どもたちの写真とプロフィールと寝ている場所の写真を集めた、非常にインパクトの強い写真集である。この写真集は、眠る時はベッドルームあるいはベッドと呼ばれるスペースで眠る、という生徒たちの「常識」をおおきく揺るがした。眠るためのスペースがあると考えるのは豊かな国の話でしかない、ということ、この写真集は教えてくれた。さらに、世界の子供たちの「人権」はいろいろな形で、無視されているということを生徒は垣間見たといえるだろう。

生徒の感想の例：

- 私たちのライフスタイルが当たり前だと思っていた
- 世界は貧富の差が大きい・不公平だ
- 育つ環境がその人のアイデンティティーに大きく影響している
- 自分たちがどれだけラッキーかよくわかった
- 貧しいほど子供たちが将来に夢を持っている
- ベッドルームを見ればその人・その人の生活がわかる
- 厳しい現実が見える・これが真実だ

3.3. 福島の子供たちの人権

世界の子供達の状況を見てきたが、私たちの大切な国、日本では福島の問題がある。今の福島の子どもたちの状況はどうなのか、生徒たちが知っていることをクラスで話し合った。当時、放射能を多く含んだごみを集めているがそれをどこに持っていくのかが

大きな問題となっていることをニュースで聞いて、そのことを大変心配そうに話した生徒もいた。

生徒の関心と気持ちが福島に向いたところで、オンライン新聞から福島の人々のいろいろな言葉を拾い、ナレーションとして聞かせた。

引用した言葉は下記の通り：

- 将来、甲状腺がんや白血病になっちゃうかも。普通の人生を過ごせたらいいけど…
(中学生)
- 子どもを外で遊ばせられないし、テレビばかり見ている。長女(7)の体重は25キロから33キロに増えた。(母親)
- 体力低下、色白、平衡感覚の低下に伴う転倒の増加、運動不足による肥満、ストレス性食欲不振による体重の激減…。(福島大の森知高教授)
- 生まれたばかりの赤ちゃんにがん保険をかけた(若い母親)
- 放射能でどうせ死んじゃうから、勉強しない(小学生男児)

地震・津波から2年以上たっているのに、さらに問題が深刻化していることを知り、 Fukushima問題＝原発問題であり、その本質は時間がたっても消えてなくなれないという恐ろしさを、被害者の言葉を通して生徒たちは心で感じたといえる。

3.4.福島とオーストラリアとの関係

こういう状況の福島であるが、これは福島だけの問題ではなく私たちの問題であるということを認識させ、さらに福島と生徒たちが住むオーストラリアの土地との関係を明らかにさせることにより、さらに自分に近い問題として捉えてさせようとした。それで、私たちの住むオーストラリアと福島にどんな関係があるだろう、と問いかけ、それを考える資料となる情報を2点、教材として用いた。

i. アボリジニー、ミラール族のイボンヌ・マルガルーラ氏の国連総長への手紙

英語で書かれたこの手紙を読んで、生徒はアボリジニーの人たちの聖地を荒らして採掘したウラニウムが、世界中に輸出され、福島でも使われていたことを知った。内容を日本人の友達がわかるように日本語でまとめを書くというタスクと共に、一番言葉の力を感じる箇所を指摘させた。多くの生徒が最後のパラグラフが一番パワフルだと答えたが、そのパラグラフの内容を簡単に紹介したい。「カカドゥのアボリジニーの人々が、何千年もの間、敬い恐れてきたOjanganと呼ばれるいくつかの場所・存在があります。この場所は、レンジャー採掘現場とジャビルカ採掘現場、両方につながっています。このOjanganが妨害されると、恐ろしく莫大で、大変危険な力が全世界に放たれるということを、私たちはずーっと信じてきました。私の父は70年代にオーストラリア政府に警告しましたが、当時その権威についていた人は無視しました。今あなたがたのような人々がこの訴えを聞き、行動に移すことを望みます。」

ii. 日豪プレスの特集記事「シリーズ・原発問題を考える」

原発の抱える問題と、オーストラリアの鉱山開発の問題などを学習し、オーストラリアのウラニウム鉱山開発のため、環境破壊が進みアボリジニーの人たちもヒバクシャとなっているという共通項を認識した。この記事で、生徒が一番ショックを受けたのは、原発の問題が福島の人たちに対する差別を生んでいることであった。例えば野菜なども福島で取れたものは安全じゃないのではないかと、という差別を受けている。人もいろいろな形で原発事故のために差別に遭遇している。この認識は詩を鑑賞する上で彼らの理解力を深めたと言えるだろう。

3.5. 「福島へ」を読む

くりっくにつぼんのサイトから、良太君の「福島へ」だけをテキストとして取り出し、まず、作者についてまったく情報を与えず読んだ。そして書いた人はどんな人だろう、何歳くらいの人だろう、どんな気持ちが表れているだろう、いくつも質問しているのはなぜか、などクラスでディスカッションをした。以下の意見が出された。

- 一般的な質問からだんだん個人的な質問になっている
- 差別されているけど、それでも楽しい気持ちがわかりますかと聞きたい
- 最後のラインに心配している気持ちが一番表れている
- 今何を考えていますかというところに、将来への心配があらわれている
- 恋（または失恋）をしたことがあるか、と聞いたのは、差別する人がいるかもしれないけど 福島の人でも恋をしてもいいんだよ、というメッセージじゃないか

原発問題が差別を生んでいるということが生徒にとってかなり衝撃的だったことが現れている。その後良太君の朗読のビデオを見た。詩を活字として読んだ場合と、朗読として聞いた場合、どう違うかという問いに、

- もっと心に響く感じ
- もっと意味がわかる
- 声の調子や、間を空けることでことばがもっと伝わる

などのコメントが出された。

3.6. 他の詩を鑑賞する

この詩をきっかけに、他の詩の鑑賞を楽しんだ。鍛錬された詩は言葉の力を感じ取る教材として最適だと考えたからだ。生徒全員に自分の好きな詩を一編ずつ持ち寄り朗読させた。この朗読のお手本として良太君の朗読ビデオが役立った。

生徒は自分の選んだ詩を心をこめて朗読した。集められた詩は、いのちーあいだみつを、風の又三郎ー宮沢賢治、俵万智の句などだが、この授業を受けるまで「日本語の詩」

というものに触れたことがない生徒には、好きな歌詞の一番パワフルだと思う箇所を朗読させた。英語でも良しとしたのはバイリンガルの生徒たちの心に近いものをクラスに持ってきてほしかったという理由による。

次に、生徒はポストイットを使って共感を覚えた詩や歌詞に好きな理由、感想などを書いてその詩に貼り付けた。一番人気の高かった詩は 金子いすゞの「いいえ、こたまでしょうか」であった。自分の選んだ詩に寄せられたコメントを読んで、生徒は自分とは違う解釈があって構わない、いろいろな詩の読み方、味わい方があることを知ったことは重要なことであった。

3.7.自分の想いを表現する

仕上げとして、生徒は自分の気持ちを詩にあらわしてみる、という段階にきた。しかし、詩など、以前に書いたことも読んだこともなかった、という生徒も何人かいる。そういう生徒に、書いたことのある生徒からアドバイスをあげてほしい、と促すと3つのアドバイスがあげられた。

- 写真などを見て、イメージを頭の中に浮かべる。
- まず好きな詩やスタイルなどをまねしてみる。そこに自分のオリジナリティーを入れる。
- 頭の中に浮かぶアイデアやイメージをとにかく紙の上を書いて見る。

どうやって書き始めるか、書いたことのない人にあげるアドバイスとしてかなりの確かな助言と言えるのではないか。

お題は「守りたいもの」とした。形式はフリースタイルとし、各自が選んだ形で自分の守りたいものへの気持ちを表す。いくつ書いてもいいし、俳句、川柳、短歌、詩、ラップ等なんでも良しとした。一つ強調したことは、何度も読み返し、何度も校正することの重要性である。もっと気持ちに近い表現はないか言葉を選ぶことの大切さと、非必要な言葉を省くことの大切さを強調した。

自分にとって詩を書くということは心の内面を探る個人的な行動であると認識していたので、ティーンエイジャーが、まじめに取り組むだろうか、という懸念もあった。しかし、クラスの様子を見ていると、相談しあったり、読みあったり、大変オープンだった。一人が書きかけた詩を違う生徒が手を加えて合作したりもしている。

それぞれ書けた詩を全員が好きな色の紙に好きな色のペンで書き、それをスキャンしたものをスクリーンに映し出し、朗読した。時間内にたくさん書いた生徒もいれば、たった一つの詩を四苦八苦して完成させた生徒もいた。五ー七ー五のリズムに合わせるのが言葉遊びのようにおもしろらしく、いくつかわ柳を発表した生徒もいる。

生徒の詩はくりっくにつぽんに掲載されている。

<http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/activity/wadai/01/post-32.php>

3.8. 「言葉」についてのディスカッション

まとめのディスカッションとして、「言葉とは何か」「どんな時に言葉の力を感じるか」をグループで話し合った。生徒の意見（抜粋）は以下の通り。

言葉とは：コミュニケーションの道具、人間と動物を区別するもの、芸術、武器であり解決策でもある、国々との壁やバリアを明らかにするもの、誤解を生むもの、人と人をつなぐ（関係を深める）もの、言霊、人生を変えるものかもしれない、想いの結晶化。どんな時に言葉の力を感じるか：人を傷つけてしまったとき、社会を変える力（リンカーン、マーチンルーサーキングなど）、歴史を伝える、時を越えて想いが伝わる時、涙が出る時、けんかの時。

4. ユニットを終えて（考察）

4.1. くりっくにつぼんを取り上げた理由

くりっくにつぼんは、「今を生きている人々」を取り上げ、その人たちの内面のつぶやきや本音を鮮やかにうきぼりにしているインタビューを基に書かれた記事を世界に発信している。

地球規模の問題を扱うに当たり目指したことは、遠くて自分には直接関係がない、と感じがちな問題を「自分にも関係がある問題」として捉えさせることだった。くりっくにつぼんに掲載された「福島へ」という詩を見たとき、この大きな単元の方向性が見えた。良太君のふるさとへのラブレターとも言える詩を読み、朗読している顔を見、声を聴いた時、そこに表された感情が、生徒の福島問題に関する知識を、知識以上のものに深めてくれた。また、この単元とくりっくにつぼんを通して、生徒たちは良太君と深く出会ったとも言える。人の痛みを思いやるためには「どんなに痛いだらう」と想像する力と、起こっていることの知識が必要である。良太君の「福島へ」は、大きすぎて遠くに感じてしまいがちなグローバルイシューを、個人一人ひとりに近い問題なのだということを生徒は感じさせ、それを自分たちの問題として捉えさせる大きな助けになった。

4.2. お題「守りたいもの」

「福島へ」がふるさとへの想いを詠んだ詩であることから、始めお題は「ふるさと」にしようと考えていた。2カ国3カ国間を常に移動している生徒たちにとって「ふるさと」という概念はどのようなものなのか、興味もあった。しかし、生徒が持ち寄った好きな詩を生徒たちと鑑賞しているうちに、ふるさとを含むもう少し広い意義を持ったお題の方がこの場合はふさわしいと考え、「守りたいもの」とした。生徒の詩には、自分の個性、家族の絆、友達、ペット、友達との時間、世界、自然、地球などが「守りたいもの」として表れた。

4.3.ことばの力を考える

バイリンガルの生徒達の言語能力と文化的認識力を伸ばすため、教材はあらゆるメディアから引用するが、生徒自身が授業に持ち込む情報も教材として素晴らしい役目を果たす。この単元では「生徒の好きな詩」が重要な役割を果たした。3.6の段階で、一番人気の高かった詩は金子いすゞの「いいえ、こだまでしょうか」であった。生徒のコメントの例を紹介したい。

- 人間のよろこび、孤独、悲しみなどあらゆる感情がうまく描かれている
- どんな言葉でも簡単に人を傷つけたり喜ばせる事ができる力があることを改めて知る
- 言葉の大切さを感じる。やさしい言葉をかければやさしい言葉がかえってくる
- こだまじゃなくて自分。自分のほかの人に対しての言葉は自分にかえってくる

このような形で生徒の側から一つの「言葉の力」に気づいてくれたのは、教師にとって大変喜ばしい、うれしい瞬間であった。

5. まとめとして

この単元を通して教師として学んだことは限らないが、特記したいことは、まず教材に本物を使うこと。生徒は本当に存在する、あるいは存在した人の本当の声に生き生きと反応する。くりっくにつぼんの果たした役割は大きい。もう一つは、生徒がクラスに持ち込むものを効果的に利用することの重要性を再確認したことである。これは生徒が主導権を持って授業にのぞむ姿勢など、多くの Quality teaching (2004年 NSW 教育省)の要素を含む。その為には授業のプランがある程度流動的でなければならない。それから、自分がいいと思うものをクラスメートとシェアできるという雰囲気作りが大切だということ学んだ。

この単元の原動力となったものは、くりっくにつぼんの「本物の人」の声と、生徒の声であった。たくさんの教材を読ませたり見せたりしたが、それより多くのものを生徒同士のディスカッションやコメントの中から学びあったと言えるし、この単元を通して生徒同士の繋がりが深くなったことを記しておきたい。

使用教材のリスト

- Heritage Japanese Stage 6 Syllabus Preliminary and HSC Courses (2010)
- 人権宣言 (日英)
- 写真集 Where children sleep (By James Mollison) とウェブサイト
<http://www.jamesmollison.com/wherechildrensleep.php>
- くりっくにつぼん <http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/mywayyourway/02/post-3.php>

- アボリジニーのミラール族のイボンヌマルガルーラ氏の国連総長への手紙
<http://indymedia.org.au/2011/04/16/yvonne-margarulas-letter-to-the-un-expressing-solidarity-with-the-people-of-fukushima>
- 日豪プレスから「シリーズ・原発問題を考える」
<http://nichigopress.jp/interview/%e3%80%90%e3%83%ab%e3%83%9d%e3%80%91%e5%8e%9f%e7%99%ba%e5%95%8f%e9%a1%8c%e3%82%92%e8%80%83%e3%81%88%e3%82%8b/48064/>
- 詩の魅力と「読み方」を教える授業 愛知教育大 佐藤洋一 (昭和63年)
- 福島の子供たちの現状のナレーションは下記を参照：
http://www.fukuishimbun.co.jp/localnews/nuclearpowerplant_a_yearafter/33416.html
<http://www.fukuishimbun.co.jp/localnews/earthquake/40750.html>
http://www.fukuishimbun.co.jp/localnews/nuclearpowerplant_a_yearafter/33472.html
<http://kiikochan.blog136.fc2.com/blog-entry-2724.html>
- Quality teaching (2004年 NSW 教育省)

著者

ニシムラパーク葉子は NSW 州教育地域社会省にてアジア言語を奨励する企画等を進める。外国語としての日本語の教材開発を専門とし、著書に「未来」シリーズ、「iiTomo」シリーズ (Pearson) がある。ここ数年、くりっくにつぼんのクラスアイディアの執筆もてがけ、継承語としての日本語教育に関わりこの分野における教材開発に意欲を示す。